

---

泉南市  
国際化ビジョン

---

泉 南 市

## はじめに

時代は今、新しい協調の世界を求めています。これまでわが国の国際交流は、自国の経済的発展に重きを置く傾向にありました。しかし、現在世界は国境や政治体制、イデオロギーの枠を越えて新しい秩序を構築しようとしており、わが国もその国力にふさわしい国際社会への貢献が求められています。

泉南市においては、これまで第3次泉南市総合計画が目標とする「世界に開かれた心のふれあう住みよいまち」という都市像を基本理念に国際化を推進してまいりました。平成6年9月には、泉州空港（関西国際空港）が開港されることもあり、本市においては、「国際化」へ向けて一層積極的な取組みが求められています。

そこでこのたび、総合的体系的に「国際化」を推進すべく、「泉南市にかかわるすべての人々」を対象としながら、地方自治体の立場での「国際化」、市民の立場での「国際化」を問いただし、民間活力による国際交流の促進と自治体による支援、地球的規模の課題に対する市民及び自治体が一体となった取組みの指針として「泉南市国際化ビジョン」を策定いたしました。

今後、このビジョンをもとに積極的な取組みを進めてまいりたいと存じますので、市民のみなさまをはじめ関係機関におかれましても一層のご理解とご協力を賜り、積極的にご参加頂けますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、このビジョンの策定にあたり、貴重なご意見をいただきました市民のみなさまに心からお礼を申し上げます。

平成5年9月

泉南市長 平島 仁三郎

## 目 次

### I ビジョン策定の背景

背景1 国際化の流れ .....	3
1 国際化の変化 .....	3
2 すすむ国際化 .....	4
背景2 国際化推進の目的と意義 .....	6
1 国際化と自治体の役割 .....	6
2 まちづくりと国際化 .....	8

### II 国際化推進の視点

視点1 地球社会の一員であることの自覚 .....	13
視点2 人間を主体にした国際化 .....	14
視点3 国際化をキーワードにしたまちづくり .....	15
視点4 国際空港のあるまち .....	16

### III 泉南市の国際都市像

世界に開かれた心のふれあう住みよいまち .....	19
---------------------------	----

### IV 国際化推進の課題

課題1 市民の国際的な意識の向上 .....	23
課題2 偏見・差別意識の解消 .....	25
課題3 地域の魅力の掘り起こし .....	26
課題4 都市基盤の整備 .....	27
課題5 地域産業の活性化 .....	28

## V 国際化の推進方針

### ひと1：国際感覚の醸成

- 方針1 さまざまな個性の尊重 ..... 3 1
- 方針2 異文化に対する理解 ..... 3 3
- 方針3 地域アイデンティティの確立 ..... 3 5

### ひと2：海外の人と泉南市

- 方針4 人類共通の課題への取り組み ..... 3 6
- 方針5 開発途上国への支援 ..... 3 8

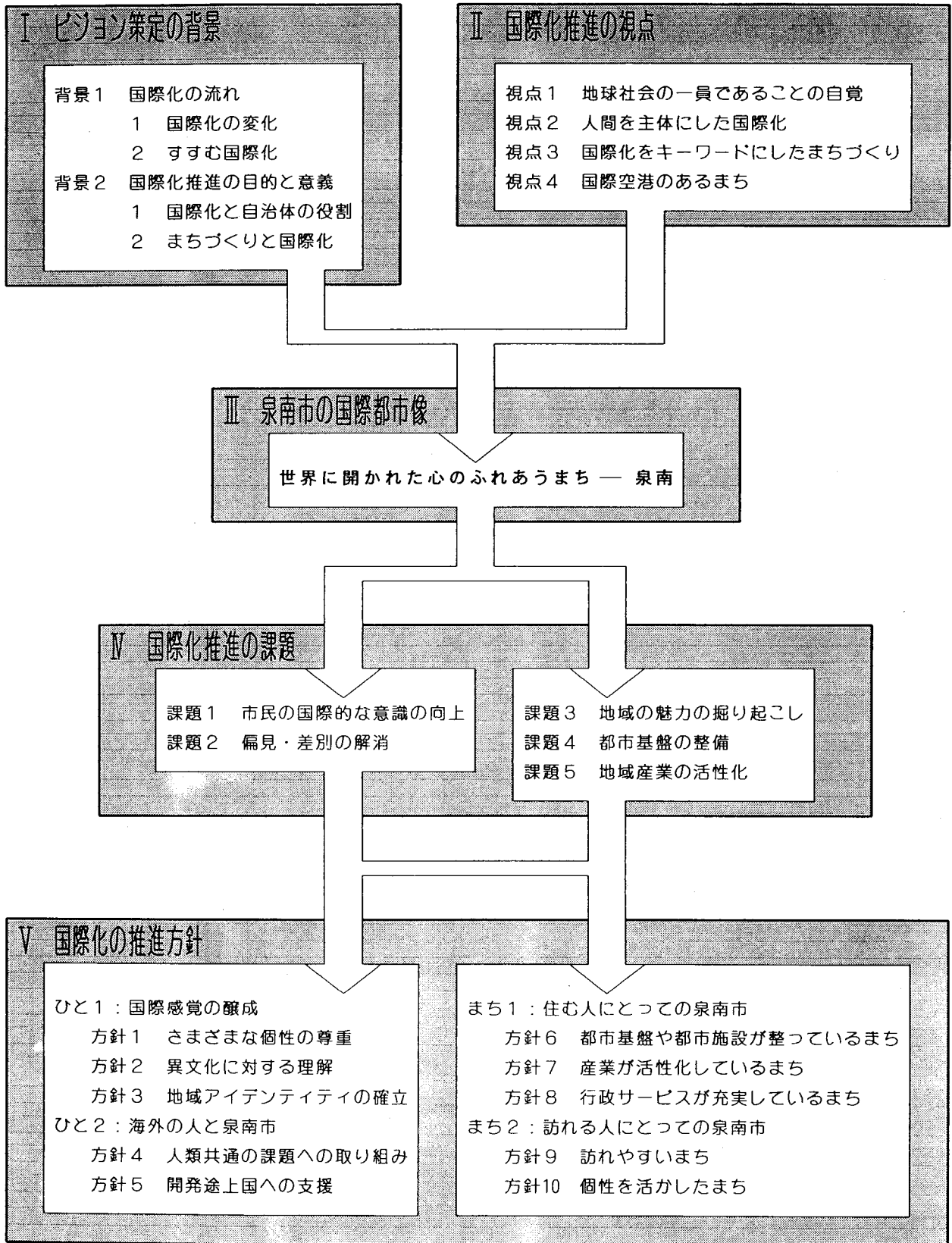
### まち1：住む人にとっての泉南市

- 方針6 都市基盤や都市施設が整っているまち ..... 3 9
- 方針7 産業が活性化しているまち ..... 4 1
- 方針8 行政サービスが充実したまち ..... 4 2

### まち2：訪れる人にとっての泉南市

- 方針9 訪れやすいまち ..... 4 3
- 方針10 個性を活かしたまち ..... 4 4

# 国際化ビジョンの体系



# Ⅰ ビジョン策定の背景

この章では、泉南市が国際化ビジョンを策定するにいたった背景として、まず社会潮流としての国際化の現状を把握します。そのうえで、本市が今なぜ国際化に取り組むのか、その目的と意義を明らかにします。

### 背景 1 国際化の流れ

#### 1 国際化の変化

かつて「国際化」という言葉は、経済政策の観点から用いられることがほとんどでした。1960年代の日本は高度経済成長期のさなかで、国際的な経済競争のなかにいかに入り込み、かつ適応していくかということが、当時の大きな関心事でした。このため、「国際化」は、もっぱら経済の分野で論議されていたのです。

ところが、1970年代から80年代にかけてわが国の経済力が高まるにつれ、「国際化」の意味はしだいに変化していきました。1984（昭和59）年に経企企画庁から出された「世界の中の日本—その新しい役割、新しい活力」（国際化研究会報告）では、「国際化」は「モノ・カネ・情報（技術を含む）・ヒト及びこれらの総体としての文化などの国境を越える往来の増大」として定義されています。つまり、かつての経済を中心とした考え方から、情報や人、そして文化までも含めて「国際化」をとらえようとする見方へと移っていったのです。

そして今日では、「国際化」は人間にかかわるものである以上、人間の意識や価値観なども切り離せないものであるとみなされるようになっていきます。

## I ビジョン策定の背景

---

### 2 すすむ国際化

世界における近年の動きをみると、1990（平成2）年に行われた東西両ドイツの再統一や1991（平成3）年のソ連邦解体、さらには、E C（欧州共同体）がすすめつつある政治、経済、社会各分野における欧州の統合など、国際社会の全体に大きな影響を及ぼす変革が相次いで起こっています。また、これと同時に、環境問題や飢餓問題、難民問題など、地球的規模で解決が求められる問題の多発と、それへの取り組みがなされています。このように現在は、かつて米ソ両大国が世界の2極をなしていた時代とは異なり、国境や政治体制、イデオロギーの枠を越えた協調関係が、世界各地で強まっています。

日本では、交通網や情報網の整備が急速にすすむなかで、企業の海外進出や外資系企業の立地をはじめ、海外渡航者数の増大、留学生受入れの拡大など、さまざまな分野で国際化が進展しています。これにともない、世界への貢献のあり方が問われたり、急増する外国人労働者に対してどのように対応するかなど、国際化に関わる多くの問題が顕在化してきています。

泉南市でも、国際社会の情勢を反映した変化をみることができます。本市の外国籍市民の総数は、人口の伸びにはほぼ比例して増加してきました。韓国・朝鮮籍の人々が、その大半を占めることに変わりはありませんが、1980（昭和55）年にはインドシナ難民とみられるベトナム人が一時的に増加したり、1990（平成2）年に行われた入国管理法の改正を機に「定住者」の在留資格をえることが可能となった（就労制限のなくなった）日系人が急増するなどしています。

また、私たちの日常生活においても、国際化は着実に進展しています。



たとえば、テレビ等で外国のニュースに接する機会が増えたり、思わぬものが輸入品であったり、知らず知らずのうちに国際化の波のなかに取り込まれているといえます。加えて、1994（平成6）年の夏には泉州空港（関西国際空港）の開港が予定されており、泉南市では今後、他の地域に比べて、より直接的に国際化の影響を受けるものと思われます。

## I ビジョン策定の背景

---

### 背景 2 国際化推進の目的と意義

#### 1 国際化と自治体の役割

##### (1) 自治体の役割

国際間関係は、かつては国と国との外交が中心でした。しかし現在では、国のなかの一地域の人々が、他の国の地域の人々と直接的に交流する機会が増えています。そして今後、交流の裾野はますます市民の間に広がっていくことが予想されます。地方自治体には、市民の身近な行政主体として、こうした民間の交流を支援する役割が求められています。

また、地方自治体自らが、国境を越えて他の国の自治体と直接関わるケースも増えています。これまでの自治体の相互交流というと、その主軸となっていたのは姉妹都市提携による親善交流でした。しかし現在では、海外に派遣された自治体職員が現地で研修を重ねたり、地域づくりについて互いに知識や知恵を交換しあうなど、国際親善の枠を越えた相互協力の姿勢がみられます。平和や環境問題といった地球規模の課題が、もはや国だけの問題でなく、地域の問題として重視されている今日、地方自治体も、地球レベルの視点をもって、諸問題に取り組んでいく必要があります。

(2) 求められる世界への貢献

「過去の日本における国際化は受益型の国際化であった」と、しばしば指摘されています。これは、自己の利益につながる場合には積極的に海外の事物を導入したものの、あまり得にならないことについては無関心であったという態度をさしています。ところが現在、日本は世界有数の経済大国となり、国際社会において大きな影響力をもつに至っています。これとともに、自国の利益を追求するばかりでなく、世界全体の共通の目標に対して貢献することが、今日のわが国には求められています。

このことは、都市のレベルにもあてはまります。これまでまちづくりというと、市域ばかりに目を向けていたことは否めません。しかし、私たちが泉南市という地域で豊かな暮らしを享受できるのも、世界とのかかわりなしに成しえるものではありません。一自治体である本市も、国際化によってもたらされる利益を受け取るだけでなく、地域の人材や技術、自然など、私たちのもっている資源を世界共通の目標の到達に向けて、開拓し、開放し、提供することが大切です。

# I ビジョン策定の背景

## 2 まちづくりと国際化

### (1) 市民生活の向上

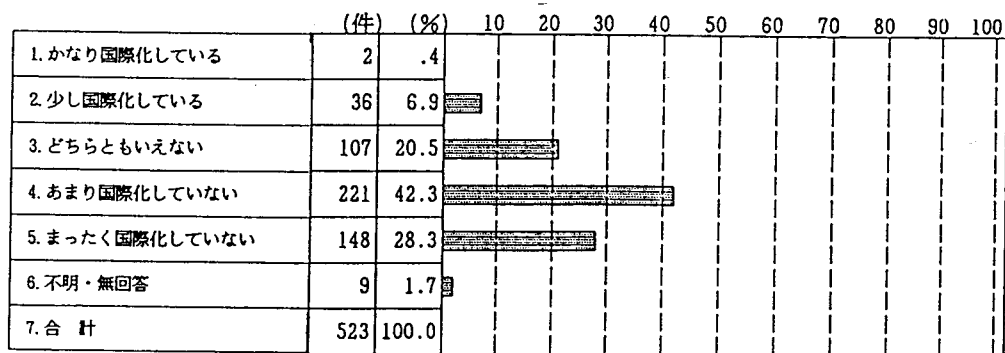
1992（平成4）年7月に実施した「国際化についての市民アンケート」の結果によると、泉南市の現状について、「あまり国際化していない」又は「まったく国際化していない」とする回答が約7割に達しています。また、同アンケートの自由意見では、「国際化より先に、まず暮らしやすいまちづくりをしてほしい」という意見が目立ちます。

国際化というと、一般に外国や外国人とのやりとりだけをイメージされる傾向が強く、市民の日常生活とは別の次元のものであるかのように思われがちです。しかし、国際化のめざすところは、基本的には、外国人を含めたすべての市民が快適に暮らしていくということにあります。

すなわち、地域の国際化において、市民生活の向上はきわめて重要な要素であり、国際化の目標そのものにも成りえるものなのです。

図 「泉南市は現在、国際化しているか」

—— 国際化についての市民アンケート結果（1992年）より ——



(2) 国際化を活用したまちづくり

「国際化」は次の2つに大別できると考えられます。そのひとつは「現象としての国際化」で、今ひとつは「目標としての国際化」です。

「現象としての国際化」は、私たちが特にそれと意識しなくてもすすんでいきます。たとえば、外国人観光客の往来などがこれにあたります。これは、いわば受身的な国際化ですが、その内容によってはなんらかの対処が求められます。また、今後起こりえることを予想し、あらかじめ対処方策を準備しておくことも必要です。

一方、「目標としての国際化」は、私たちの意図や努力なしにはすすみません。先に例をあげた外国人観光客についていえば、仮に、泉南市を訪れる外国人観光客をもっと増やそうとすると、その受入れのために、観光ルートを整備したり、宿泊施設を整えたりしなければなりません。このように、「目標としての国際化」は、自ら目標を設定し、努力し、それを実現させるという積極的、能動的な国際化なのです。この目標設定、努力、実現という過程は、計画的なまちづくりの過程そのものといえます。

ところで、私たちはまちづくりのための基本計画として、第3次泉南市総合計画を策定しています。この計画がめざす都市像と関連づけて国際化の目標を設定すれば、本市がめざすまちづくりを実現するための有力な手段として、国際化を活用できるのです。

## II 国際化推進の視点

泉南市の国際化は、次の4つの視点にたって推進します。

- 1 地球社会の一員であることの自覚
- 2 人間を主体にした国際化
- 3 国際化をキーワードにしたまちづくり
- 4 国際空港のあるまち

### 視点1 地球社会の一員であることの自覚

前章でみたように、今日、地球上のすべての人も都市も、単独で、あるいは国という枠組みのなかだけで存立し、活動しているわけではありません。政治や経済、文化、環境など、あらゆる分野において、国の境を越え、互いに影響を与え合い、依存し合う関係にあります。

このことは、私たち泉南市民と泉南市にとっても例外ではありません。たとえば、私たちの日々の食卓にのぼる食物がしばしば外国産であったりすることなども、その1例です。このように、意識するとなしにかかわらず、好むと好まざるにかかわらず、私たちは地球上のすべての人や都市と相互に影響し、依存し合う関係にあります。

言い換えれば、泉南市民・泉南市は、地球上のすべての人・都市とともに、地球という社会を構成する一員なのです。私たちはまず、地域社会の一員であると同時に、地球社会の一員でもあるという自らの立場を自覚すべきです。このことが、泉南市民・泉南市が自らの国際性を育てていくうえでの大前提となります。

## Ⅱ 国際化推進の視点

---

### 視点2 人間を主体にした国際化

国際化事業といわれるものは、人々が互いに理解するための交流事業を開催したり、外国人を受け入れるための諸制度を整備したり、あるいは国際空港や国際会議場を建設するなど、多岐にわたります。しかし、こうした事業をすすめていく主体は何であるかという、人間にほかなりません。また、何のための国際化であるかという、これもつきつめれば、人間のための国際化であるということになります。こうしたことから、泉南市の国際化は、市民の一人ひとりを推進の担い手とし、人間による人間のための国際化をすすめるべきです。

また、泉南市の国際化の対象は、市民だけにとどまるべきではありません。本市には国内外の人々が来訪し、さらに外部に目を向けると、本市と直接的な往来はなくても、地球社会の一員として多様なかかわりをもつ世界の50億の人々がいます。たとえば、本市の道路は、市民の日常生活に役立っているのと同時に、市域外の多数の人々に対しても開かれています。これと同様に、本市は、世界のすべての人々に対して開かれた存在である必要があります。泉南市の国際化は、「住む人」、「訪れる人」、「海外の人」－泉南市にかかわるすべての人々を対象として、推進すべきです。



視点3 国際化をキーワードにしたまちづくり

地域の国際化がめざすところは、基本的には外国人を含めたすべての市民がともに快適に暮らしていくことであり、その意味で市民生活の向上は、地域における国際化の重要な要素となっています。また、泉南市の国際化が人間のための国際化である以上、それは市民の日常生活の向上やまちの利便性の向上等と広く重なりあうものでなければなりません。

このように考えると、泉南市にとっての国際化は、従来からおしすすめてきた地域振興や市民福祉の向上という方向性に沿うものであるべきです。したがって、外国人に配慮しながらも、ことさら特別扱いするのではなく、市民にとって住みよいまち、魅力あるまち、外国人にとっても住みよいまち、魅力あるまちであるという観点から、従来からめざしてきた地域振興や市民福祉の向上を推進すべきです。そして、むしろ、国際化を、この地域振興や市民福祉の向上をすすめる手段として、活用すべきです。

つまり、国際化をキーワードにしたまちづくりとは、外国人対応だけを意味するのではなく、まちの機能を広く充実していく過程をさします。

## II 国際化推進の視点

---

### 視点 4 国際空港のあるまち

泉南市の沖約5kmの海上で建設がすすめられている泉州空港（関西国際空港）は、1994（平成6）年の夏ごろに開港が予定されています。開港後、空港を利用する国際旅客数は44,200人／日（年間離着陸回数16万回相当時）、国際貨物量は2,400トン／日（同）と見込まれています。このような集客、集荷能力を擁し、24時間世界に開かれた空港が、本市域に出現するわけですが、この空港が将来、本市の国際化に与える影響に関しては、まだ未知数の部分が多いことは否めません。

しかし世界の例をみると、国際空港の至近地域では、空港のインパクト（各種サービス需要の発生、利便性の向上による産業立地条件の飛躍など）を活用して、流通施設や産業団地、リゾート施設などを整備して都市の活性化をはかった事例がみられます。また、国際空港の存在は、都市の知名度やイメージの向上という点において、大きな可能性を開くものであると考えられます。

こうした観点から、泉州空港は、泉南市が国際化をすすめるうえでの重要な装置、あるいはきっかけとして位置づけることができます。そして、産業分野をはじめ、国際化のさまざまな分野で空港インパクトを積極的に活用すべきです。

### III 泉南市の国際都市像

#### 「世界に開かれた心のふれあうまち — 泉南」

国際都市というと、一般に、多くの外国人が居住していたり、あるいは国際的な施設が整っていて数多くの国際イベントが開催されるような都市を思いうかががちです。

しかし、国際的なまちとは、決してこのようなイメージに限定されるものではありません。外国人の往来はあまり多くなくても、また、世界の人々の注目を浴びるようなまちでなくても、国際都市というにふさわしいまちは存在すると考えられます。

国際都市のもっとも重要な条件の一つに、そこに住んでいる市民の意識がどれほど世界に向かって開かれているか、ということがあります。その意識は「国際的な意識」と呼べますが、それは必ずしも、海外の事情に精通していたり、外国語に堪能であることを意味しません。たとえば、言葉の通じない外国人に道を尋ねられたとき、違和感なく何とか教えてあげようという気持ちがあれば、その人の意識は十分国際的であるとみなすことができます。泉南市の国際化は、何よりもまず、こうした開かれた意識をもつ市民が集うまちであることを目標とします。

また、国際化は、市民の日常生活とは別次元のものであるかのようにも思われがちです。しかし、外国人や外国の文化に接する機会が増えた今日、国際化は市民生活のなかにも浸透しつつあります。生活レベルでの国際化は、外交のような華やかさはないにせよ、地に足のついた国際化として重視されます。泉南市では、住む人がみな、わけへだてなく快適に生活し、また、訪れる人が地域の魅力に触れて、来て良かったと思えるような、そ

### Ⅲ 泉南市の国際都市像

---

んなまちとなることをめざします。

以上のことから、泉南市の目標とする国際都市像をまとめると、

- 内外の人々を国籍を問わず暖かく迎え入れるまち
- 異なる文化をもった人とも心を通いあわせることのできるまち
- すべての市民が快適な日常生活を送れるまち
- 内外の人が訪れ地域の魅力に触れるまち

となります。

なお、この都市像は、第3次泉南市総合計画がめざす「世界に開かれた心のふれあう住みよいまち」と重なるものです。

## IV 国際化推進の課題

前章で設定した泉南市がめざす国際都市像を達成するためには、これから克服、改善していかなければならないいくつかの課題が考えられます。このビジョンでは、それらの課題として、

- 「ひと」の側面から
  - 1 市民の国際的な意識の向上
  - 2 偏見・差別意識の解消
- 「まち」の側面から
  - 1 地域の魅力の掘り起こし
  - 2 都市基盤の整備
  - 3 地域産業の活性化

の5つを提起します。

#### 課題1 市民の国際的な意識の向上

泉南市がめざす国際化の主体が、市民一人ひとりであるという観点からすると、本市の国際化の推進にあたっては、市民が国際的な意識をもつことが最重要課題となります。ただし、そうした意識は一朝一夕で形成されるものではなく、長い時間をかけて醸成していくものであるといえます。国際的な意識は、学習によっても培われますが、内外の人々との実際の交流体験によって、より実感をもって育むことができます。

「国際化についての市民アンケート」の結果によると、外国人の知人・友人がいるとした市民は約1割と少ないのですが、外国人と身近に接している人ほど、外国人に対する違和感が少ない傾向がみられます。また、国際交流への参加希望を尋ねたところ、「外国人と言葉等を教えあいたい」、

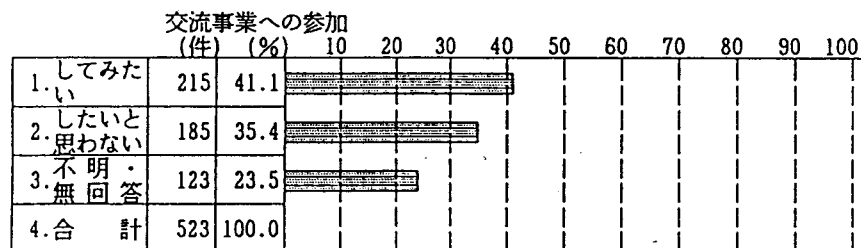
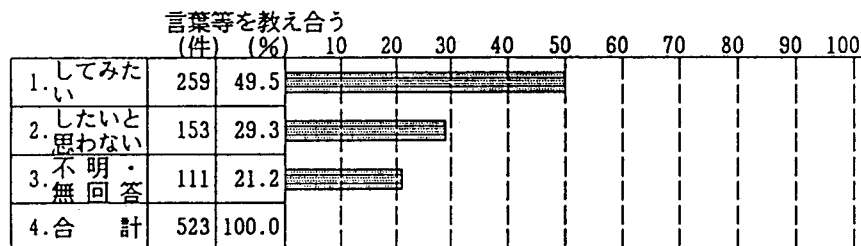
#### IV 国際化推進の課題

「交流事業に参加したい」という意向が、それぞれ市民全体の5割、4割を占めています。

このように、市民の間では、国際的な意識の向上をめざす芽は育ちつつあります。今後、市民の自発性を重視しつつ、身近な交流を拡大していくことが求められます。

図 「国際交流に参加したいか」

—— 国際化についての市民アンケート結果（1992年）より ——





## 課題2 偏見・差別意識の解消

泉南市には現在、約6万人の市民が住んでおり、このうち約1%、つまり100人に1人が外国籍の市民です。そして、外国籍市民の大半は、韓国・朝鮮籍の人たちです。

本市が1991（平成3）年に実施した「人権問題に関する市民意識調査」の結果によると、人を差別することについて、「良くない」と回答した市民は全体の約9割を占めています。ところがその一方で、現実の日本社会については、在日韓国・朝鮮人に対する差別が「かなりあると思う」又は「あると思う」とする人が全体の7割を超えています。

こうした状況を見ると、泉南市が国際化をすすめるにあたっては、まず本市の内側から、在日韓国・朝鮮籍の人々に対する偏見や差別意識を解消していくことが、先決課題であると考えられます。

## IV 国際化推進の課題

---

### 課題3 地域の魅力の掘り起こし

それぞれの地域には、たとえ地元の人々が気づいていなくても、その地域固有の魅力が必ずあります。この魅力を磨きあげることが、内外の人々を地域に引きつける重要なポイントになります。

泉南市ではまず、地域の魅力を掘り起こすことが当面の課題です。そして次に、その魅力（特性）を内外の人々に対してPRしていくことが求められます。本市の地域特性として、たとえば自然環境に目を向けると、大阪湾に臨み、和泉山脈に接し、川や多くのため池があって、水と緑に恵まれています。そして、このような自然に恵まれながら、大阪市内とは鉄道で約40分の時間距離にあり、大都市のサービスを手軽に享受できる地域となっています。他の地域からみれば、この豊かな自然環境と大都市圏の利便性の同居が、大きな魅力であるはずです。加えて、世界に開かれた泉州空港（関西国際空港）の立地も、本市の重要な地域特性です。

なお、地域の魅力は、自然や利便性にとどまるものではありません。歴史や文化、まちの雰囲気や人そのものが、地域の魅力の源泉となることがあり、その掘り起こしが急がれます。

---

#### 課題 4 都市基盤の整備

道路や公園・緑地、下水道などの整備をすすめることは、市民の生活環境を向上させると同時に、地域のイメージアップにも役立ちます。

泉南市の現状をみると、たとえば市民1人あたりの都市公園面積は1.6㎡(1991(平成3)年4月1日現在)であり、大阪府平均の4.0㎡(同)を下回っています。また、1993(平成5)年7月に供用開始が予定されている公共下水道は、同時点の普及率(人口)が約7.6%と見込まれていますが、大阪府平均の65.1%(1991(平成3)年3月31日現在)には遠く及びません。欧米諸国と比較してわが国の下水道整備が立ち遅れていることはしばしば指摘されていますが、下水道は公衆衛生のみならず、河川などの水質保全という問題においても重要な役割をもっています。

快適な市民生活の実現をめざすとともに環境に配慮したまちづくりをすすめていくことは、泉南市が国際的なまちとなるための必須課題であるといえます。

なお、地域の生活環境や、それがもたらすイメージは、施設などの量的なものだけで決まるものではありません。量よりも質が、地域の豊かさに大きくかかわる場合もあります。たとえば、市民の一人ひとりが自覚をもってまちの環境美化に取り組むことによって、心の行き届いた美しいまちをつくりあげることができます。こうした質の向上にも留意しつつ、まちづくりをすすめていくことが大切です。

### 課題5 地域産業の活性化

貿易の拡大、企業の海外進出など、産業・経済は最も国際化がすすんでいる分野です。それだけに、地域産業といえども、世界経済とのかかわりなしに考えることはできません。

泉南市の代表的な地場産業である繊維産業は、零細企業が主体で生産性が低く、またNIE S（新興工業経済地域）の追い上げ等を受けて低迷が続いています。商業は小規模経営が多く、1店あたりの販売額は大阪府平均の6割と、その停滞ぶりがめだっています。また農業は、都市近郊型農業や花き栽培が盛んですが、急速な都市化により農地が分断されて営農条件が悪化するなどの問題が生じています。

このように、本市の地域産業はそれぞれ問題を抱えており、その活性化に向けての対策が必要とされています。そして、これらの課題解決に対するひとつの積極的な方策として、泉州空港（関西国際空港）のインパクトを利用することが望まれます。泉州空港の開港により、本市の地域産業のビジネスチャンスは著しく拡大することが見込まれています。そして、この空港インパクトをいかに活用し、新しい事業展開に結びつけていくかということが、地域産業全体の活性化にとって、大きなカギになっているといえます。

## V 国際化の推進方針

この章では、第Ⅲ章で設定した泉南市がめざす国際都市像、「世界に開かれた心のふれあうまち — 泉南」を実現するための基本方針を明らかにします。

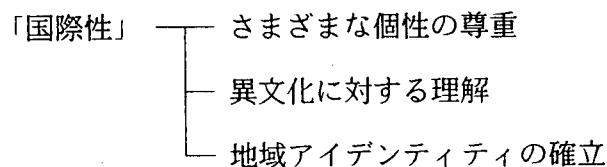
基本方針の設定にあたっては、第Ⅱ章で設定した4つの視点、第Ⅳ章で抽出した5つの課題を踏まえ、泉南市にかかわるすべての人々を対象としながら「ひと」と「まち」に焦点をあて、

- 「ひと」の側面から
  - 1 国際感覚の醸成
  - 2 海外の人と泉南市
- 「まち」の側面から
  - 1 住む人にとっての泉南市
  - 2 訪れる人にとっての泉南市

という4つの柱を設定します。

## ひと1：国際感覚の醸成

泉南市民は、国際性を備えた市民となることをめざします。



### 方針1 さまざまな個性の尊重

私たちが属している地球社会は、それぞれが異なる個性をもつ50億を超える人々で構成されています。個性の違いは、肌の色や言語、生活様式などの外面的な違いから、ものの見方や考え方、価値観などの内面的な違い

## V 国際化の推進方針

---

にまでおよんでいます。

この50億の人々は、地球社会の一員として等しく尊重され、共存していかなければなりません。しかし現実には、異なる個性に対する偏見や否定が、あるいはその存在に対する無知が、さまざまな誤解と差別を生じ、共存の障害となってきました。このことは、世界ばかりでなく、私たちの地域社会にもあてはまります。

私たちは、地球社会には異なる個性が存在することを認識し、それぞれが対等な構成員として、互いの人格を認め合い、人権を尊重する開かれた心をもった市民になることをめざします。

このような国際性を備えた市民になるためには、学習の機会をもつことが重要です。

このため、学校教育における子どもの国際感覚の醸成をはじめ、次代を担う青少年の海外交流を促進したり、また生涯学習の一環として国際的な意識を養う各種講座を開催するなど、市民の学習機会の拡大をはかります。

さらに広報活動を強化して、泉南市における外国籍市民の状況などを紹介し、人権問題などについて考える機会を設けます。

また、日常業務を通して外国人と接する機会が増える泉南市職員については、特にその対応の準備が必要であり、海外派遣などの職員研修を充実し、国際感覚のいっそうの養成につとめます。

